



## 概要

- 現在の相撲は、1909年(明治42年)から「日本の国技」と言われ、他の武道と比べて施設や用具も比較的簡単で、手軽にできることから広く国民に親しまれている。
- 大正時代において関東と関西に分かれて興行していたものを統合する形で、大日本相撲協会として発足し(大正14年)、戦後、名称を(財)日本相撲協会とし今日に至っている。
- アマチュア相撲は、昭和21年に(財)日本相撲連盟が設立され、運営や指導などをおこなっている。
- 相撲の歴史は古く、文献上では「古事記」と「日本書紀」の神話伝承の相撲の記録が最も古く、これらが相撲の起源と考えられている。
- 古代、世界各国でも相撲の形に非常によく似たスポーツが盛んにおこなわれていたようで、今でもモンゴル、インド、ロシアなどにおいて、日本の相撲によく似た格闘技がおこなわれている。
- 我が国では太古から農作物の収穫を祈り、占う農民の祭事として農耕儀礼が盛んであり、庶民(農民、漁民)の神事として発展したものである。今日もおその名残が、各地の農村において相撲をとまう村の鎮守祭などにその習俗が見られる。
- 人間の本能として互いに四つに組んだり、手足を使って相手を倒す原始的な形態と、子供の自然な遊びから発生してきた相撲は運動の基本とも言える格闘技である。
- 相撲場の施設は屋外に設けられる場合と屋内に設けられる場合の二つに大別される。
- プロである大相撲とアマチュアの相撲団体では土俵規格に若干違いがある。

## 相撲場の種類

### 屋外の相撲場

- 学校の運動場の一角や神社の境内に多く見ることができる。土を周囲より一段高く持って突き固めた土俵を造る。
- 土俵の東西南北の四隅に丸太で柱を立て、屋根をかけたものもある。

### 屋内の相撲場

- プロ力士による相撲競技の最大規模を有する国技館や各地武道館の中に設けられている。
- 屋外と同様に土を盛った土俵場や、相撲部屋や大学の施設で、練習を主体とした土を高く盛り上げないで俵を伏せた稽古土俵や、俵なしで円形に3~4.5cm掘り下げた摺鉢土俵などがある。

## 寸法

以下は、アマチュア団体である(財)日本相撲連盟の規程に基づくものである。

### 土俵の広さ

- 土俵は一辺を600~727cm(全国高等学校体育連盟では、一辺が730cm)とした正方形に土を盛り、固く突き固めて中心に直径4.55mの円を小俵をもって造る。
- 勝負を決する境界線は、勝負俵(小俵、徳俵)の外縁で、この円内において競技をおこなう。
- 土俵の中央には、70cmの間隔で仕切り線を白色のペイントで引く。

### 土俵の高さ

- 土俵の土盛りの高さは、30~50cm(全国高等学校体育連盟では、40cmを基準としている。)で、側面のすりつけ勾配は45度位が適当である。
- 土盛りが高すぎると危険が伴いやすく、35~40cm位の高さが安全な高さと考えられる。

## 勾配

- 屋外の土俵にあっては、表面排水を考慮して中央部から周囲に1%位の勾配が望ましい。

## 方位

- 土俵の正面を土俵周辺の状況により決定し、正面から土俵に向かって左を東、右を西として東西の力士の控えだまりを設け、向正面側には行司だまりを設ける。

## 土俵の材質

- 土俵の材質は、規程で特に定められてはいないが、土俵の土として適する条件は、以下のとおりである。
  - ①風雨により飛散や流失の少ないこと。
  - ②乾燥に強く、ひびわれなどの少ないこと。
  - ③排水の良いこと。
- 関東では入手の容易な荒木田土や砂に苦汁を適量に混合して使用されているが、他地域においては赤土の粘性を砂で調整して使用することが多い。
- 突き固めの際、全量の土が一律の含水状態であることが、沈下やひびわれを防ぐために重要である。

## 附属品

### 勝負俵(小俵・徳俵)

- 勝負俵の規格は、米俵を利用して、長さ64cm×高さ14cm×横幅11cmの形を作る。中に土、砂、玉砂利を混ぜて平均に詰め込み、6~8mmの太さの縄で7箇所をしっかりと縛る。
- 勝負俵の埋め込みは、土俵面に高さ4cmを残して土俵にしっかりと固定する。俵を縛った縄の結び目は、下側にして土俵に埋め込む。
- 勝負俵は計24個とし、小俵が20個、徳俵が4個である。

